二〇二三年六月二三日

明易や炊けたと告ぐる炊飯器　うつぎ
代掻きを終へて労ふ老農機　千鶴
夏木立日の斑のをどる道辿る　む べ
送電塔踏んまへ立ちし植田かな　明日香

二〇二三年六月二二日

雨音を破りて蟇の声高し　素秀
青梅雨や欅の下は傘いらず　む べ
大木の裳裾にすがる梅雨きのこ　ぽんこ
梅天下跳ね橋上がる気配なし　うつぎ
梅雨晴間鉄錆匂ふ埠頭かな　素秀

二〇二三年六月二一日

梅雨に倦む六甲連山雲脱がず　よし子
観音の御手美しき梅雨の晴　みづき
梅雨晴間京の寺町たもとほり　はく子
山暮れて高鳴る水音草蛍　うつぎ
梅雨寒し甘酒茶店に雨宿り　ぽんこ
遣水に転がり落ちし毛虫かな　あひる

二〇二三年六月二〇日

あめんぼの水輪夕日を弾きけり　きよえ
目の慣れて星増えてゆく夜涼かな　たか子
白南風の通ふ松浜ビーチヨガ　千鶴
緑陰の岩抱擁す洩れ日かな　ぽんこ
青葉寺浅海めきし日の斑かな　なつき
霧の道抜けて展けしお花畑　はく子

二〇二三年六月一九日

研ぎあげて先ずはトマトを試し切　はく子

二〇二三年六月一八日

夏痩せといふ足運びには見えず　たか子

二〇二三年六月一七日

こだまして背からも響く滝の音　素秀

毎日句会みのる選・二〇二三年六月二五日